



奥之院参道に立ち並ぶ約20万基を越す墓碑や供養塔。これもまた弘法大師の足元に眠れば極楽往生できるという信仰によるもの。

高野 変わらない

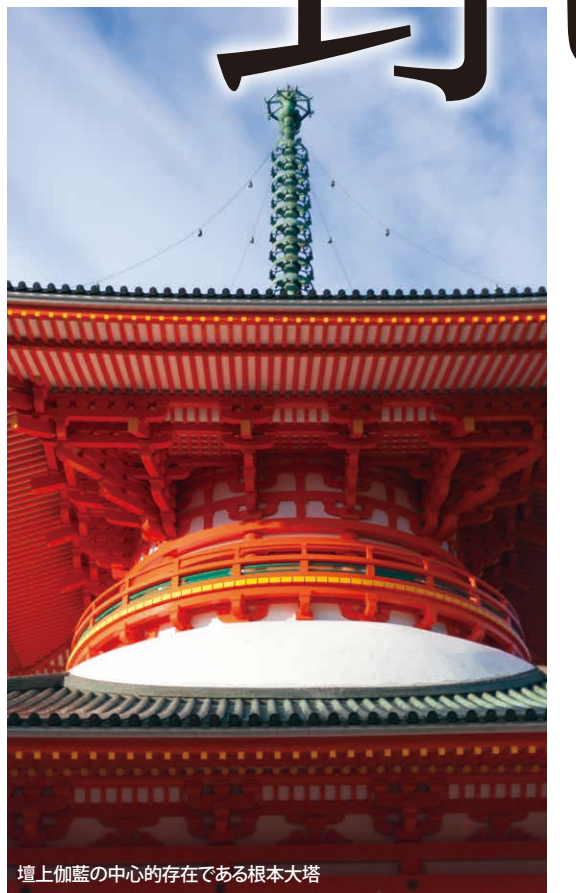
樹々に抱かれて感じる
空海の不変なる想い

内八葉外八葉と称される山々に囲まれた山上盆地、高野山。人々が容易に近づけないその地は、弘法大師・空海が816年に開いた真言密教の聖地である。空海はまず七里四方に結界を張り、壇上伽藍の建設に取り掛かる。そこでは堂宇の配置などで曼荼羅の世界を立体的に表現しようとした。それはまさしく密教の奥義そのものであり、空海の脳内世界の具現化であったにちがいない。

高野山の町中を歩くと僧侶と出会い、

読経の声に触れることができる。樹齢数百年の大杉の中、奥之院の参道を奥まで歩き進めると、空気の密度が増し空海が存在が徐々に感じられるようになる。『有りがたや、高野の山の岩蔭に大師はいまだおわしますなる』。835年に入定した空海は、今も世の中の平和と人々の幸福を願いつづけているという。そんな大師信仰の源泉の一つともいえるのが、1200年以上続いてきた「生身供」である。どんな天候であっても、毎日二度、空海に運ばれる食事であり、そしてそれを統括しているのが、維那と呼ばれる奥之院の仕侍僧である。

「午前3時には起床し、御供所の神様や仏様にお供えを行い、4時から食当とよばれる当番が精進料理を作ります。その内容は様々ですが、口外してはなりません」と語るのは唯那の仁賀大善さん。「御供所で作られた食事は、6時と10時半に燈籠堂に届けます。温かいものは温かく、冷たいものは冷たいまま。また寒い日は火鉢と共に、暑い日はうちわもお供えいたします。食材は全国からいただいたもので、食当は日誌をつけ、メニューが重ならないように気をつけ、野菜などの命を活かし、農家の方々の苦勞も無駄にしないように注意しながら作ります」。配膳している間は料理の湯気が立ち、そうした瞬間にお大師さまの存在を確かに感じるのだという。



壇上伽藍の中心的存在である根本大塔



④空海に食事を届ける生身供。維那が先頭を歩き、食事の入った唐櫃(からびつ)を運ぶ。



③高野山真言宗の総本山金剛峯寺。高野山全体の宗務が行われる。



②高野山の総門である大門。現在の建物は1705年に再建されたもので、猛々しい金剛力士像が安置されている。



①壇上伽藍の西端にある御社。丹生都比売大神(にうつひめのおおかみ)と高野御子大神(たかのみこのおかみ)を祀る。